

少人数教育の充実に向けた取組

【いわき教育事務所】

学 校 名	いわき市立内郷第二中学校
学年・教科等	第2・3学年 数学科・英語科

数学科・英語科における少人数のよさを生かした授業の改善

取組の内容

1 補正教員を活用した習熟度別指導の実施

習熟度別学級を編制し、個に応じた指導を進めている。昨年度は、欠員補充と震災加配の常勤講師を活用し、全学年の数学と英語で実施した。今年度は、30人学級補正と復興推進加配の常勤講師を活用し、2・3年の数学と英語で実施した。

2 習熟度別指導の導入にあたって

各教科ごと、生徒に対するオリエンテーションの時間を設け、具体的に各コースの学習内容、授業の進め方などについて、丁寧に説明する。機械的に成績だけでコースに分けるのではなく、生徒たちに自分に合ったコースを選択して学ぶ意義をわかりやすく説明し、生徒たちが納得して、コース選択ができるようにする。

3 コースの違い

	Aコース	Bコース
問題練習量	多い	少ない
難易度	基礎・基本+難しい課題	基礎・基本中心
授業の速さ	テンポよく	緩やかに、細かなステップ
特徴	(数学) 指名なし板書・発表 (英語) 音声指導と文字指導の両立	説明練習、指名板書・発表 音声・視覚指導重視

4 数学科の実践

(1) 説明練習

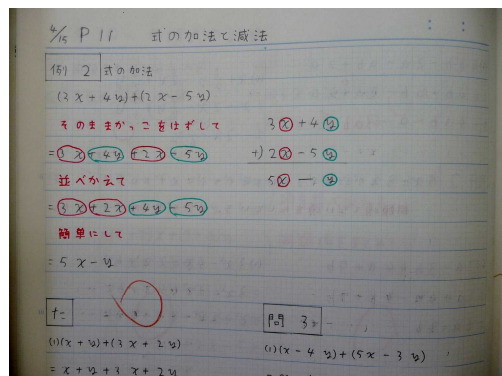
授業では、教科書の式を棒読みするのではなく、「〇〇をして…」 「〇〇だから…」 というように、行間を読み取らせる。また、視覚にうったえるノートづくりをさせる。例えば、「そのままかっこをはずして」「並べかえて」「簡単にして」というように説明する。教師の後について、説明させたり、生徒同士で説明させたりする。その後、Aコースでは、早く問題を解き終わった生徒に、指名なしで板書・説明させ、説明力の向上につなげる。Bコースでは、意図的に指名し、繰り返し練習させ、基礎・基本の定着につなげる。

(2) ○つけ法

○つけ法とは、机間指導しながら、全員に○をつける指導方法である。○をつけることにより、生徒が自信をもち、発表につなげることができる。×はつけず、部分肯定で○をつけるので、どこまでが正解か分かり、解決のヒントになる。また、少人数学級編制により、40人学級より、短時間で全員に声をかけることができるので、生徒の集中力が高まり、解決意欲につながる。

(3) デジタル教科書と電子黒板の活用

関数や図形を視覚的にイメージしやすく表すことにより、基礎・基本の定着に結び付けたり、見通しをもって課題解決に取り組めるようにしたりしている。



＜ノートづくり、○つけ法＞

5 英語科の実践 (Aコース)

(1) Warm-up 辞書引き大会

生徒たちは、興味をもって取り組んでおり、学級や授業の雰囲気作りに役立っている。なお、ここで探した単語は、次の基本文の口頭練習で活用する単語を意図的に選択している。また、これは、高校進学の英語学習に役立てる意図がある。

(2) Oral Introduction 基本文の口頭練習

ターゲットセンテンスを読み込ませ、口頭練習を繰り返し行うことにより、基本表現を身に付けさせる。練習の中で、既習事項の単語をフィードバックさせるとともに、生徒から出る単語も活用し、使える単語、英文を増やしていく。

(3) Activity ペア活動、コミュニケーション

ペア活動では、ゲームの中で、積極的にコミュニケーションを図らせ、基本表現の活用力をより確実にする。

(4) バージョンアップ活動

文法を押さえた上で、今まで学習した表現を活用させ、レベルアップを図る。口頭練習に加えて、自作の英作文の発表までを目標とする。発表を称賛することにより、生徒に自信を付けさせる。生徒をほめるポイントとして、学習量、正しさ、正確さ、オリジナリティー、多様性を観点に表現を工夫しながら、称賛している。生徒へ、正のフィードバックを返し、自信と意欲につなげている。

(5) 構造的板書

カードを活用し、ロス時間なく、生徒に提示している。文法事項を含め、生徒の理解を助け、思考を深めるような構造的な板書を行っている。板書を見ると、1時間の学習の流れが分かり、適時、学習内容の振り返りができるようになっている。

6 英語科の実践（Bコース）

(1) 視覚にうったえる導入、身近な単語を使用

ピクチャーカードを見せることで、どんな英文を言っているか、内容を推測できるようにさせる。できるだけ、身近な単語、イメージしやすい名詞や動詞を使い、繰り返し英文を聞かせることにより、理解に結びつけさせる。

(2) 音声指導の重視

繰り返し、英文を聞かせることにより、内容を推測させる。振り返りと板書により、内容理解につなげる。そして、確認したことを、板書し、全員で言わせる。最後に、一人ずつ言わせることにより、本時のターゲットセンテンスの定着に結び付ける。



＜視覚にうったえる導入＞

7 教員の指導力の向上

(1) いわき教育事務所指導主事による要請訪問

学校の実態に合った指導助言をお願いしている。昨年度と今年度、英語科で2回、主任指導主事に授業を参観していただき、習熟度別指導の進め方、基礎学力定着のための指導法、教材研究の仕方等について、具体的にご指導いただいている。

(2) 現職教育の充実

一人一研究授業の実践を中心として、校内研修を通して、教員の指導力の向上を図っている。

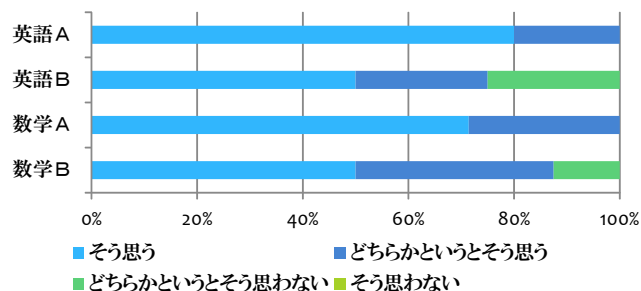
(3) 定着確認シートの活用

データを入力し、県平均の正答率と比べ、陥没点を明確にしている。その後、授業の中で課題となる問題を取り上げ、解説するとともに、教師自身の授業改善のヒントとして活用している。

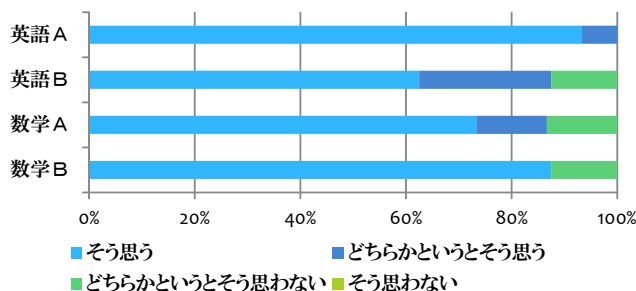
成果と課題

1 生徒の意識（1学期末のアンケート調査から）

☆授業が分かりやすい



☆習熟度別授業がよい



Aコース、Bコースともに、授業が分かるようになり、約90%以上の生徒が、習熟度別指導がよいかという設問で、「そう思う、または、どちらかというと思う」と回答している。現在の授業の進め方に満足していることが分かる。さらに、コースに合った指導方法の工夫に努めたい。

2 習熟度別指導の課題

(1) 教職員の確保

30人学級補正、30人程度学級補正、復興推進加配等により、基準以上の教員が配置されている。今後も、学校のニーズに合った教科の講師が配置されることになれば、継続的に習熟度別指導が可能となる。また、1学年の30人学級編制が弾力的に運用されることになれば、より積極的に少人数指導が選択できるようになり、習熟度別指導が進めやすくなる。

(2) 授業力の向上

教員の指導力の向上なくしては、習熟度別指導も効果が上がらない。習熟度別指導に特化した研修が必要と考えている。また、現職教育で少人数教育の研修を深めていくことはもちろんだが、教育事務所の要請訪問などを活用し、より効果的に研修を進めていくことが求められている。